

大学入試センター試験の特徴 —高校教員からみた新教育課程—

*研究開発部進学適性研究部門 豊田 秀樹
大学入試センター副所長 坂元 昂
**管理部進学情報課進学指導専門官 内田 昭久

1 はじめに

昭和58年に中央教育審議会は、時代の変化に対応する学校教育の在り方の中で特に重視されなければならない視点として、(1)主体的に学ぶ意志、態度、能力などの自己教育力の育成、(2)知、徳、体の調和のとれた基礎・基本の徹底、(3)個性と創造性の伸張、(4)文化と伝統の尊重、を審議経過として報告している。

また昭和62年には、教育課程審議会が幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程に共通した規準の改善のねらいについて、中央教育審議会の審議経過報告を受ける形式で、(1)豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成、(2)自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成、(3)国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実、(4)国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成、を答申

している。

以上の審議経過を踏まえて平成元年に告示された高等学校学習指導要領に基づく教育課程は、平成6年4月より実施された。新教育課程は、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的、基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努める」という一般方針によって編成されている。この一般方針は、現在、教育現場において評価を行う際の、いわゆる「新しい学力観」の骨子を成すものである。

実施されて間もない時期であり、新教育課程に対する評価が定まるまでには数年必要と思われるが、現在、教育現場でどの様に受け入れられているかを調べることは、新教育課程の最初の評価となり、同時に大学入試科目の指定の際の大切な情報となる。大学入試センターでは、新教育課程の実施3ヶ

月後に、高等学校教員を対象として、新教育課程に関する調査を実施した。

本稿で報告する調査の主たる目的は

(1) 新教育課程と旧教育課程の教育効果の比較

(2) 大学入試における指定科目数が高校教育へ与える影響

(3) 入試で指定された科目と指定されなかった科目の高等学校における教科指導

という3点に関して、高等学校教員の意識を調べることである。

2 調査概要

調査対象は、全国7地区で開催された「平成7年度大学入学者選抜大学入試センター試験説明協議会」に出席した高等学校教員3,771人である。調査時期は、平成6年7月6日より7月15日までである。有効回答数は2,017であり、回収率は53.5%であった。有効回答者の主な属性は以下のとおりである。

- ・性別：男(87.9%)、女(12.1%)
- ・地域：北海道(5.5%)、東北(9.4%)、関東甲信越(31.7%)、東海北陸(13.4%)、近畿(18.2%)、中国四国(11.5%)、九州沖縄(10.4%)
- ・所属高校：国立(0.7%)、公立(76.5%)、私立(22.8%)
- ・担当教科：国語(14.2%)、地理歴

史(13.9%)、公民(2.3%)、数学(27.6%)、理科(19.1%)、外国語(19.4%)、職業(1.5%)、その他(1.8%)

2-1 新旧教育課程の比較

図表1は、「平成6年度からの新教育課程は、旧教育課程に比べて今後どのような教育効果が予想されますか」という設問に対して、5段階で回答した値の平均値である。「内容の多様性」の平均値は2.34であり、回答の分布の中心は「多様になる」の側にある。しかし「教えやすさ」、「基礎学力」、「基礎知識」に関しては、平均値が3.3以上であり、回答の分布の中心は消極的な評価の側にある。「基礎技能」、「学習意欲」、「学習態度」、「偏差値の影響」に関しては、平均値は3をわずかに上回るものの、旧教育課程とほとんど変わらないと評価している。

3を中立的な回答とすると、教科・科目数が増えたことによって、内容が多様になることに関しては賛成している。けれども新指導要領で重視している基礎学力、基礎知識、基礎技能、学習意欲、学習態度に関しては、必ずしも望ましい影響があるとは考えられていない。

本調査は、新教育課程が実施されてから3ヶ月目に行われた。回答者である高校教員が、授業のための新しい指

導案の作成に最も忙しい時期に評価したことになる。このため、新教育課程の評価そのものに重点を置いて解釈することは早計であるかもしれない。

図表1の平均値は、施行後、少なくとも1年以上経過した後に同様な調査を行い、評価がどのように変化するかを考察するための規準として利用することができよう。

2-2 指定科目数の影響

図表2は、「通常、大学ではあらかじめ受験科目を指定しますが、教科・科目の指定が多い場合は、少ない場合に比べて高校教育にはどのような影響が考えられますか」という設問に対して、5段階で回答した値の平均値である。先と同様に3を中立的な回答とすると、「知識のバランス」、「大学入学後の各専門分野への適応」、「基礎学力」、「基礎知識」の平均値が低く、「学習のゆとり」の平均値が高いという結果となった。「基礎技能」、「学習意欲」、「学習態度」の平均値は3に近い。

受験科目数が多い場合と少ない場合とで高校教育への影響を比較すると、多い場合のほうが、知識のバランスがとれ、基礎学力、基礎知識が高まる。しかし、ゆとりはなくなると考えられている。

2-3 科目指定の有無の影響

図表3は、「指定されない科目を勉強させる場合に、指定された科目を勉強させる場合と比べてどのような影響が考えられますか」という設問に、5段階で回答した値の平均値である。「学習意欲」、「学習態度」、「学習のゆとり」の平均値が高く、その他の項目の平均値も3を超えている。

受験科目として指定されない科目は、された科目と比較して、その科目を学習する際に学習意欲、学習態度に関して必ずしも望ましい影響があるとは考えられていない。しかもゆとりもなくなると考えられている。

指定されない科目のゆとりがなくなると考えられている理由は、指定された科目の学習に時間を奪われるために、指定されない科目をも、ゆとりをもって指導できないということであろうか。

3 考察

多くの高校教員は、受験科目として指定された教科を勉強する場合のほうが、そうでない場合よりも望ましい学習が行われるために、受験科目が多い場合のほうが、少ない場合よりも高校教育に良い影響を与えていると考えている。しかし、一方では、受験科目数が増えることは高校生活におけるゆとりがなくなることであるとも考えてい

る。現実に入試科目数は減少の傾向にある。

この2つの相反する要求は、共通試験と個別試験の理念を生かすことによって満たされる。具体的に述べるならば、共通試験では、各大学ができるだけ多くの科目を指定し、個別試験では、大学入学後の専門教育に必要な少数の科目を指定することである。本末転倒で残念なことではあるけれども、共通試験における指定科目が多ければ、高校生はより真剣に多くの科目を履修できる。

個別試験に対する共通試験の重みをほほどにしておけば、高校生はゆとりを持って学習でき、専門で必要となる個別試験科目の勉強にも専念できる。共通試験の科目を多く指定するだけであれば、各大学の試験実施の負担も増えない。

また、主としてセンター試験によっ

て多くの科目の学力を評価し、2次試験では面接や小論文によって個性や表現力を確かめる方式を採用すれば、受験生に過度の負担をかけることにはならない。

たとえ少数の科目を指定する場合でも、共通試験の科目のうちで、多くの科目の中から最も成績の良い科目のみを選抜資料として利用する大学が増えれば、自分の得意分野を探すために、高校時代にできるだけ多くの科目を履修する生徒が増えるであろう。

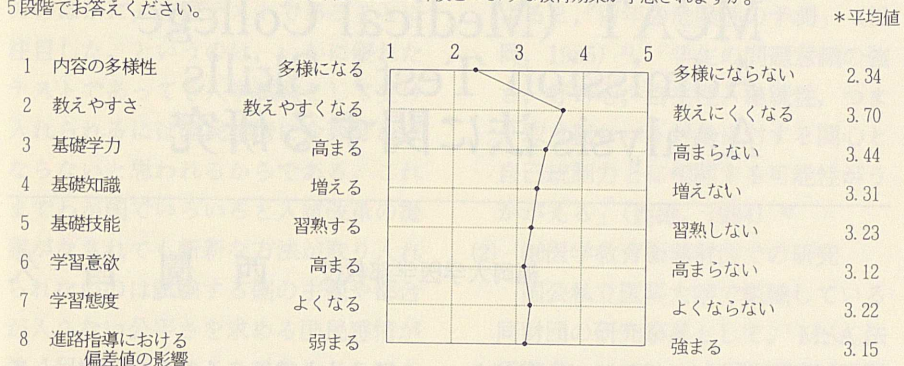
逆に、大学が指定した少数の科目に合わせて、高校のカリキュラムが組まれるような事態が生じれば、新教育課程の理念が生きない恐れがある。本調査の結果は、安易な指定科目数の減少が、高校教育を歪める原因となることを警告しているといえるのではないだろうか。

*立教大学社会学部助教授（平成7年4月より）

**千葉県立匝瑳高等学校教頭（平成7年4月より）

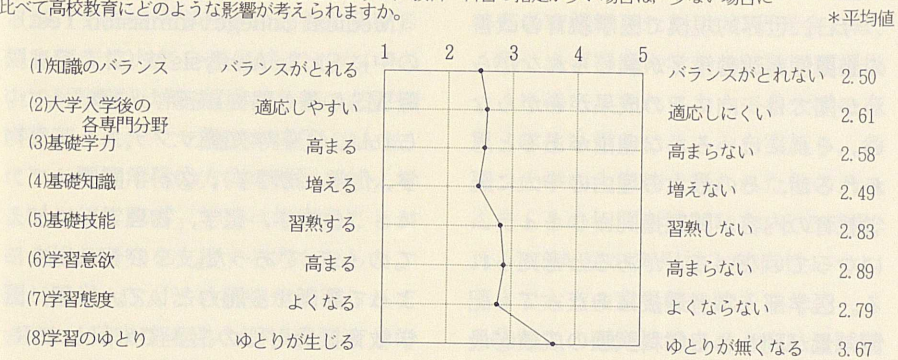
図表 1

平成6年度からの新教育課程は、旧教育課程に比べて今後どのような教育効果が予想されますか。
5段階でお答えください。



図表 2

通常、大学ではあらかじめ受験科目を指定しますが、教科・科目の指定が多い場合は、少ない場合に比べて高校教育にどのような影響が考えられますか。



図表 3

指定されない科目を勉強させる場合に、指定された科目を勉強させる場合と比べてどのような影響が考えられますか。

